「自然素材」で快適な住環境に

駿河屋

新型コロナウイルスでテレワークなどが広がり自宅で過ごす時間が増え、住環境への関心が高まっている。そうした中、化学物質を使わない無垢（むく）木材など自然のままの建設資材に着目した7年前の書籍が売り上げを伸ばしている。執筆したのは、ゼネコン勤務を経て家業の工務店を継いだ駿河屋（東京都墨田区）の一桝靖人社長。生産地を訪れ建材を厳選し顧客に提案してきたビジネスモデルが、コロナ禍を経て若い世代らの注目を集めている。

駿河屋は、注文住宅やリノベーション事業などを手掛け、室内環境の改善に役立つ建材にこだわって事業を展開している。一桝社長は、接着剤なども含めて化学物質を使っていない建材を「自然素材」と呼び、顧客のニーズに合わせて提案している。緊急事態宣言後、自然素材を使った家を建てたいという要望が増えたという。その中でも若い世代や女性の関心が高いと感じている。コロナ禍によって室内で過ごす時間が増え、「家庭を持つ女性が、子どもにとって良い住環境を作りたいと思う傾向が強くなっている」と一桝社長は指摘する。

一桝社長

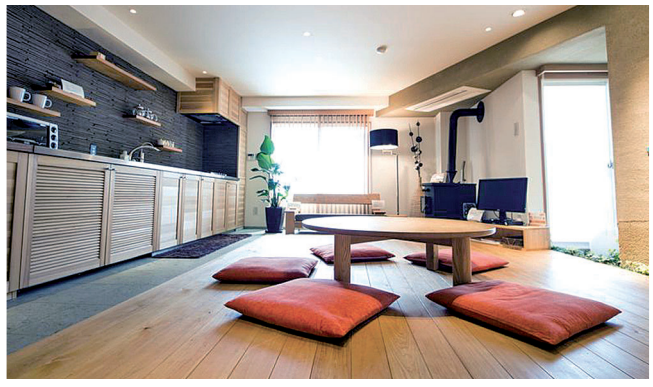
スコープ
住まい

同社が扱う自然素材は、防虫剤や漂白剤を使っていない無垢木材が代表格となる。自然乾燥させ天然泥染めした純国産のい草で作った畳、蜜蝋（みつろう）でコーティングした床材、接着剤にかわを使用した建材、カビ防止のための樹脂を混ぜていないケイ藻土なども用いている。

生産者を訪問したときの様子
（熊本県のい草農家で）

加工方法も重視している。例えば木材の場合、伐採したまま自然乾燥させる方法と、機械で人工的に乾燥させる加工方法では、香りや手触りが変わるという。一桝社長は「どのような環境で育ち、どのように加工・保管されたかを知るべきだ」と主張する。

在宅時間増え若者・女性から注目


モデルルーム

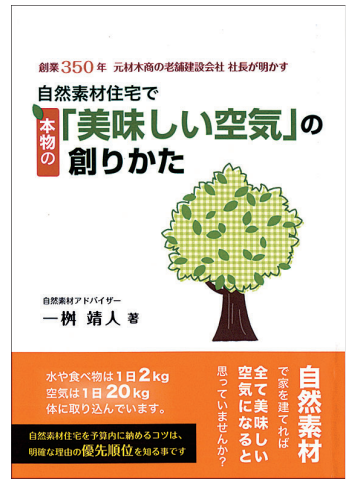
商材の選定に当たっては、北海道の稚内でも九州の鹿児島県でも全国各地の生産者の元を直接訪れる。品質に加えて、製造過程へのこだわりや生産者の人間性、仕事への姿勢などを自ら見聞きすることを大事にしている。い草の選定では、い草農家の作業を実際に体験して判断した。

言葉や写真、動画だけでは伝わりづらいと考え、こうした自然素材だけを使った宿泊体験可能なモデルルームも用意。一桝代表は、実際の暮らしに近い環境で体感してもらうことで「初めて良さが分かる」と話す。

化学物質を使った建材を用いた場合、化学成分が揮発して空気に混ざり、シックハウス症候群を引き起こす場合がある。同社は、そうした懸念を踏まえ、化学物質を極力使わないという姿勢だが、一桝社長は「自然素材が必ず良いとは限らない」とも指摘する。自然素材には細やかな手入れが必要になる。製造に手間が掛かることが多く、高価格になってしまう。人によっては、無垢木材がアレルギーの原因になる可能性もある。このため一桝社長は自然素材の長所と短所を正しく理解してもらった上で、顧客のライフスタイルや予算に沿った提案を行っている。

同社は不動産事業も手掛けており、自然素材を用いた住宅を求める顧客へのトータルサポートも展開中だ。既存住宅を購入する場合の不動産の選び方や購入後のリフォームまで相談に乗っている。一桝社長は「駿河屋仕様で満足する住宅環境を提供していきたい」と力を込める。

住環境をテーマに2013年、一桝社長が執筆した。同社が考える本当に安心できる素材の選び方や優先順位、自然素材の予算や手入れの話などを具体的な事例を交えて紹介している。信頼できる施工会社の選び方なども説明している。

コロナ禍後に再び注目が集まり、電子書籍版がアマゾンランキング（7月の建築、建築文化、住宅建築の3部門で1位を獲得した。アマゾン公式サイトで購入できる。

自然素材住宅で
本物の「美味しい空気」の
創りかた